

## 日本における人文地理学の動向 : その1つの小論

著者	奥野 隆史
雑誌名	筑波大学人文地理学研究
号	18
ページ	103-116
発行年	1994-03-25
その他のタイトル	The Trend of Human Geography in Japan : An Overview
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00127073">http://hdl.handle.net/2241/00127073</a>

# 日本における人文地理学の動向

## — その1つの小論 —

奥 野 隆 史

I 日本の人文地理学の歩み  
II 景観論の論争

III 日本の地政学  
IV 都市システム研究

### I 日本の人文地理学の歩み

1つの学問分野が近代的な学術分野として独立・成立するためには、その分野が専門的な研究・教育組織、学協会、学術雑誌を固有することが条件となるであろう。その意味では、日本において人文地理学を一構成要素とする地理学が近代的学術分野として独立・成立したといえる時期は、1920年代前期であった。すなわち、研究・教育組織に関しては1911年に東京帝国大学理科大学地質学科に地理学講座が設立され<sup>1)</sup>、山崎直方が兼任教授（当時は東京高等師範学校教授）<sup>2)</sup>としてこれを担当し、地質学教室から独立して地理学教室が創設された。さらに、1919年理学部<sup>3)</sup>に地理学科が新設された。その設立理由は、東京帝国大学（1932, p.942）によれば、（1）地理学は世界の大勢を明らかにし、その応用分野が少なくないこと、（2）欧米の諸大学では地理学が独立した学科として設けられ、多数の学生が教育されていること、（3）世界の情勢に鑑み、地理学の普及を計るとともにその研究者を養成することは我が国の急務であることがあげられている。この設立理由において当時の地理学に対して期待されていたことは、世界にわたる地域的情報の提供であり、日本の全学術分野の場合と同様に欧米とりわけ西欧の科学知識の急速な導入であった。新設された地理学科は、地質・鉱物両学科からの転科学生などを受け入れて発足し、1921年に最初の卒業生1名（秋岡武次郎）を出した。このような東京帝国大学における地理学講座の設立に先立って、京都帝国大学文科大学では1907年に史学科が設置され、その中に史学地理学講座が設立され、当時農商務省技師であった小川琢治がこれを担当した<sup>4)</sup>。この講座は、東京帝国大学の地理学講座が地質学教室から分離したこととは異なり、設立当初から史学科の中で独立したものであり、また小川琢治は山崎直方と同じ地質学出身であったにもかかわらず漢籍に明るく、また人文地理学に対しても強い関心を寄せていたため<sup>5)</sup>、文科的色合いの強いものであった。1911年に第1回の卒業生（寺田貞次）を出している。

これら2帝国大学の地理学講座創設以前にも地理学に関する授業は開講されており、東京帝国大学文科大学史学科では1886年以降リース（L. Riess）や坪井九馬三や養作元八が、経済学部<sup>6)</sup>では山崎直方が担当していた。また1872年に開校した師範学校（後に東京師範学校、東京高等師範学校に校名変更）を初めとする大阪・宮城・愛知・広島・長崎・新潟などの師範学校（1873年・1874年に開校）

では、小・中学校教員養成のための地理教育がなされていた。しかし、それらは必ずしも専門的な地理学研究者を養成する機関ではなかった。

学協会については、東京地学協会が1879年に設立された。この協会はイギリスの Royal Geographical Society に模して創立されたものであり、構成員は華族・軍人・外交官などが主であり、石田(1969)が述べるように、活動目的は探訪によって経済・政治・軍事を達成することにあり、サロンの雰囲気 را帯びた協会であった。ここでいう「地学」とは土地にかかわることを研究する分野(地球科学)を意味し、一種の慣用語である。しかし、東京地学協会が地学会(理科大学地質学教室の談話会に相当し、発足の詳事は不明。発足期は1888年頃)と合同した1893年以降は構成員の中で研究者が徐々に増加し、それに伴って学術協会的性格が加味されていった。当時では地学の中における地理学の地位は微弱であり、地質学との混合が極めて強かった。地理学が地学から分離して独自の学協会をもつに至ったのは、京都帝国大学地理学教室の関係者を中心として地球学団が組織された1924年、および東京帝国大学地理学教室の同好会々員と東京高等師範学校の関係者によって日本地理学会が創立された1925年であった<sup>7)</sup>。それ以降、これらの学協会での講演・研究発表および後述の機関誌を通じて、日本の地理学の研究活動は本格化していった。しかし、地理学中の一分野としての人文地理学が学協会を固有するようになった時期は、第2次世界大戦後であり、1946年に西日本地理学会(1948年より人文地理学会)、1952年に経済地理学談話会(1953年経済地理学研究会、1954年より経済地理学会)、1959年に政治地理研究会(後に日本政治地理学会)と歴史地理研究会(1966年より歴史地理学会)などが発足した。

学術誌に関しては、「地理学評論」(現在まで続刊、但し1945年4月~1947年5月は休刊)が日本地理学会の設立と同時に、また「地球」(1937年6月廃刊)が地球学団発足の翌年にそれぞれ機関誌として創刊された。これらの雑誌の発刊以前に前述の東京地学協会による「東京地学協会報告」(1879年~1896年)と「地学雑誌」(1889年から現在まで続刊)、東京地質学会による「地質学雑誌」(1893年から現在まで続刊)、日本歴史地理学会による「歴史地理」(1899年から現在まで続刊)<sup>8)</sup>、地理歴史学友会による「歴史と地理」(1900~1901年)、史学地理学同好会による「歴史と地理」(1917~1934年)、地理教材研究会による「地理教材研究」(1922~1931年)、地理教育研究会による「地理教育」(1924~1941年)などがすでに刊行されていた。しかし、それらは地質学や歴史学に重点が置かれていたもの、あるいは教育的・啓蒙的な内容が主とされたものであり純学術雑誌とはいいい難い雑誌であった<sup>9)</sup>。

かくして、1920年代前期に日本の地理学は独立的な科学分野として成立したが、この時期においては2つの大きな特徴をもっていた。それは、(1)日本の全科学分野の近代化初期にみられたと同様に、先発諸外国で開発された地理学知識の急速な導入、および(2)それと関連して、近代地理学の発祥地といえるドイツやフランスの地理学界における当時の傾向の影響を強く受けたことである。ドイツ地理学界は第1次世界大戦前までの時期に黄金時代を迎えていたといわれ(Dickinson, and Howarth, 1933)、地表上の諸現象間の関係に関する科学としての地理学観と相互関係を有する諸現象の空間集合体としての地域観がほぼ定着し、さらにダーウィン主義に基づく動態的地域観も提唱されてい

た<sup>10)</sup>。1920年代前期は、この黄金時代後半にラッachel (F. Ratzel) による自然と人間にかかわる全現象を包括した壮大な地理学観が現れ、次いでヘットナー (A. Hettner) のコロロギー的視点や彼の方法論をより操作的なものにしたシュリユーター (O. Schlüter) の景観重視の地域論が提示され、さらにゲオポリティクの抬頭がみられた時期に相当していた。両帝国大学の地理学教室を創設した山崎と小川はドイツに、また1928年に発足した東京文理科大学の地理学教室を主導した田中啓爾はフランスに留学し、それぞれの教室での地理学教育は留学先での学風を反映したものであった。また、1920年代以前の黎明期に発刊された「地学雑誌」の創刊号に巻頭論文として掲載された小藤 (1889) は、田村 (1978) によれば、ラッachelの *Anthropo-Geographie* I の第1編第1章そのものであると指摘され、また文科大学および他大学の地理学講義に用いられた坪井 (1905) は、吉田 (1982) が述べるように、ラッachelの *Politische Geographie* に基づいて著作された教科書であった。1920年代前期以降各大学から専門的研究者が輩出し、研究者層が厚くなるに伴って数多くの翻訳書が刊行された。1945年までの人文地理学関係の翻訳書をまとめると第1表のようになる。この表によれば、その当時における欧米で刊行された主要著書が訳書となっていたこと、および1940年代における日本の地政学の出現に伴ってハウスホーファー (K. Haushofer) の訳書が極めて多く刊行されたことが理解される。このような訳書ばかりでなく、「地理学評論」では創刊号から外国文献の紹介欄が設けられ<sup>11)</sup>、「地理教育」では第10巻 (1930) から抄訳欄が用意されていた。このような訳書と紹介・抄訳を通じて欧米地理学が受容され、日本のフィールドにあわせた独自の研究が展開されていった<sup>12)</sup>。

1920年代前期における地理学成立以降しばらくは、地理学がもつ求心力はラッachelの影響もあって機能し、自然と人文の両現象を地人相関論的に展開した研究が行われていたが、1930年に始まった景観論を巡る論争 (これについては後述する) を契機として、地理学は自然地理学と人文地理学とに分裂していった。第2表は1924年 (雑誌「地球」の創刊年) から現在までの人文地理学関係の主要誌掲載論文を年代別・主題別に分類し、その数をまとめたものである。論文総数としては第2次世界大戦中を除いては毎年の掲載数に大きな変動はみられないが<sup>13)</sup>、主題別の構成については変化がかなり著しい。特徴的な変化をあげれば、(1) 1920年代後期から1930年代前期にかけて主流を占めていた地誌学論文が年とともに減じ、最近ではほとんどみられなくなっている。(2) 都市を含めた集落と農業は伝統的な研究素材として定着しているものの、前者については1960年代後期から都市研究が村落研究を凌駕するに至り、後者については最近では地位低下の傾向がみられる。(3) 経済地理学部門において生産地理学に比べて商業や観光を主題とした消費地理学の比重が増大している。(4) 地理的な知覚や行動に着目した研究が数多く展開されつつある。ラッachelは自然の人類に加える作用のタイプとして4種のものを取りあげ、そのうち自然による個体の心身への影響を、その影響が本質上生理学的ないしは心理学的なものであるとして地理学の問題から除外している (飯塚, 1949)。知覚・行動地理学の登場は、このタイプの影響をも地理学問題の枠組みに組み込みつつあることを示している。

ところで、景観論に対する論争を契機として自然地理学の羈束から脱した人文地理学は、その後当時の時局を背景として騰出した地政学 (もしくは地政治学) の試練を受け (これについては後述する)、さらに第2次世界大戦中の研究中断を経て、終戦直後から再興が行われた。1945年には東北帝国大学

第1表 1945年までの人文地理学関係翻訳書

1. 谷井頼助訳(1915):『孤立国 前編』東文堂, 380p. Von Thünen, J.(1826): *Die isolierte Staat*. 第1部第1編.
2. 石川三四郎(1925):『非進化論と人生』白楊社, 405p. Reclus, E.(1905): *L'homme et la terre* の第1巻第2節を含む.
3. 伏見義夫(1926):『人文地理学概論』積善館, 558p. Huntington, E. and Cushing, S.W.(1924): *Principles of human geography*. 3rd. ed.
4. 村尾昇一訳(1926):『地理環境文化史 上』而立社, 571p. Semple, E.C.(1911): *Influences of geographical environment*.
5. 細井一六訳(1927):『世界地理発見史—十七・八世紀—』古今書院, 519p. Heawood, E.(1912): *A history of geographical discovery in seventeenth and eighteenth centuries*.
6. 近藤康男訳(1929):『孤立国』成美堂, 538p. Von Thünen, J.(1826・1863): *Die isolierte Staat*. 第1部第1・2編, 第2部第1編.
7. 松尾俊郎訳(1929):『人文地理学』古今書院, 550p. Brunhens, J.(1910): *La géographie humaine* の英訳書(1920年).
8. 市川誠一訳(1930):『海洋論—諸国民発展の源泉としての海—』古今書院, 148p. Ratzel, F.(1911): *Das Meer als Quelle der Völkergrösse*.
9. 菊川忠雄訳(1930):『経済地理概論(改造文庫第1部第66編)』改造社, 275p. Horrabain, J.E.(1923): *An outline of economic geography* (Plebs textbooks no.4).
10. 国松久弥訳(1930):『地理学の概念』古今書院, 238p. Graf, O.(1925): *Von Begriff der Geographie im Verhältnis zu Geschichte und Naturwissenschaft*.
11. 国松久弥訳補(1930):人文地理学の目的. 国松久弥:『人文地理学と文化景観』共立社, 1~127, Schlüter, O.(1906): *Die Ziele der Geographie des Menschen*.
12. 国松久弥訳補(1930):文化景観地理学序論. 国松久弥:『人文地理学と文化景観』共立社, 129~200. Schlüter, O.(1919): *Die Stellung der Geographie des Menschen in der erdkundlichen Wissenschaft*.
13. 徳重英助訳(1931):『人種地理学—環境と人種—』古今書院, 268p. Taylor, G.(1927): *Environment and race*.
14. 石内 勇訳(1932):『政治地理 境界論』古今書院, 137p. Fawcett, C.B.(1921): *Frontiers, a study in political geography*.
15. 河田喜代助・中島満洲夫抄訳(1932):『社会地理学』古今書院, 387p. Huntington, E. and Carlson, F.A.(1929): *Environmental basis of social geography*.
16. 川西正鑑訳補(1933):『地理学批判』有恒社, 272p. Wittfogel, K.A.(1929): Geopolitik, geographischer Materialismus und Marxismus. *Unter dem Banner des Marxismus*. Jg. III Heft 1,4,5.
17. 佐藤 弘・国松久弥訳(1933):『景観と文化の発達』古今書院, 298p. Passarge, S.(1922): *Landschaft und Kulturentwicklung in unsere Klimabreiten*.
18. 山口貞夫訳(1933):『人文地理学』古今書院, 366p. Vidal de la Blache, P.(1922): *Principes de géographie humaine*.
19. 淡川康一抄訳(1935):『交通及び聚落と地形』古今書院, 200p. Kohl, J.G.(1841): *Der Verkehr und die Ansiedelungen der Menschen in ihrer Abhängigkeit von der Gestaltung der Erdoberfläche*.
20. 阿部市五郎抄訳(1935):『政治地理学綱要』古今書院, 369p. Supan, A.G.(1922): *Leitlinien der allgemeinen politischen Geographie* の第5章を除く.
21. 辻村太郎・山崎禎一訳(1935):『人文地理学』古今書院, 186p. Maull, O.(1932): *Anthropogeographie*.
22. 綿貫勇彦訳(1935):人文地理学の目標. 綿貫勇彦:『地理学方法論』地人書館, 1~39. Schlüter, O.(1906): *Die Ziele der Geographie des Menschen*.
23. 綿貫勇彦訳(1935):人文地理学の位置. 綿貫勇彦:『地理学方法論』地人書館, 40~60. Schlüter, O.(1919): *Die Stellung der Geographie des Menschen in der erdkundlichen Wissenschaft*.
24. 綿貫勇彦訳(1935):地理学の本質及び任務. 綿貫勇彦:『地理学方法論』地人書館, 61~94. Hettner, A.(1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen, und ihre Methode*.
25. 阿部市五郎訳(1936):『生活形態としての国家』叢文閣, 299p. Kjellén, R.(1916): *Staten som livsform* の独訳書(1924年).
26. 辻村太郎・能登志雄訳(1936):『人類地理学』古今書院, 200p. Krebs, N.(1921): *Die Verbreitung des Menschen auf der Erdoberfläche (Anthropogeographie)*.
27. 塩谷安夫・仙波泰雄・安藤次郎訳(1938):『支那の農業』改造社, 599p. Buck, J.L.(1937): *Landutilization in China*.

28. 間崎万里訳(1938)：『気候と文明(岩波文庫)』岩波書店，422p. Huntington, E.(1915)： *Civilization and climate*.
29. 松原秀治訳(1938)：『言語地理学(富山房百科文庫)』富山房，238p. Dauzat, A.(1922)： *Géographie linguistique*.
30. 三好武二訳(1939)：『支那の土地と人』偕成社，626p. Cressey, G.B.(1934)： *China's geographic foundations*.
31. 飯塚浩二訳(1940)：『人文地理学原理 上, 下(岩波文庫)』岩波書店，294p., 314p. Vidal de la Blache, P.(1922)： *Principes de géographie humaine*.
32. 小原敏士訳(1940)：『世界史の自然的基礎』生活社，197p. East, W.G.(1938)： *The geography behind history*.
33. 服田彰三訳(1940)：『太平洋地政治学—地理歴史相互関係の研究—』日本青年外交協会，520p. Haushofer, K.(1925)： *Geopolitik des pazifischen Ozeans*.
34. 阿部市五郎訳(1941)：『地政治学論』科学主義工業社，113p. Kjellén, R.(1916)： *Staten som lifsform* の独訳書(1924年)の第2章.
35. 飯塚浩二訳(1941)：『大地と人類の進化 上』岩波書店，307p. Febvre, P.V.(1922)： *La terre et l'évolution humaine*.
36. 石島 栄・木村太郎訳(1941)：『大東亜地政治学』投資経済社，303p. Haushofer, K.(1935～1940)： Bericht über den indo-pazifischen Raum. *Zeitschrift für Geopolitik*. Jg. 12, Heft 1～ Jg. 18, Heft 4.
37. 向坂逸郎訳(1941)：『ドイツ』中央公論社，351p. Ratzel, F.(1898)： *Deutschland*.
38. 土方定一・坂本徳松訳(1941)：『地政治学入門(近世代叢書12)』育生社，143p. Haushofer, K. u. a.(1928)： *Bausteine zur Geopolitik*. 第1章～第3章.
39. 山口貞夫訳(1941)：『島と人』古今書院，355p. Aubert de la Rue, E. (1935)： *L'homme et les îles*.
40. 阿部市五郎訳(1942)：地政治学概念の史的発展. 玉城 肇訳：『地政治学の基礎理論』科学主義工業社，4～48. Haushofer, K. u. a.(1925)： *Bausteine zur Geopolitik*. 第1章.
41. 安藤鏗一訳(1942)：『独逸の工業地域』東洋社，205p. Von Geldern-Crispendorf, G.(1933)： *Die deutschen Industriegebiete*.
42. 伊藤兆司訳(1942)：『農業地地理学の諸問題』古今書院，358p. Waibel, L.(1933)： *Probleme der Landwirtschafts-geographie*.
43. 金生喜造訳(1942)：『領土・民俗・国家—地政学の原点—』三省堂，292p. Kjellén, R.(1916)： *Staten som lifsform* の独訳書(1924年).
44. 佐藤莊一郎訳(1942)：『太平洋地政学』岩波書店，589p. Haushofer, K.(1925)： *Geopolitik des Pazifischen Ozeans*.
45. 高山洋吉訳(1942)：『大東亜地理民族学』地平社，302p. Passarge, S.(1933)： *Geographische Völkerkunde*.
46. 玉城 肇訳(1942)：地政治学の本質. 玉城 肇訳：『地政治学の基礎理論』科学主義工業社，89～236. Maull, O.(1936)： *Das Wesen der Geopolitik*.
47. 望月勝海・佐藤晴生訳(1942)：『支那 第1支那と中央アジア』岩波書店，411p. Von Richthofen, F.(1877～1912)： *China*.
48. 横溝直二訳(1942)：『アメリカ経済地理』生活社，786p. McCarty, H.H.(1940)： *The geographic basis of American economic life*.
49. 若井林一訳(1942)：『生命圏と世界観(文化選書)』博文館，274p. Haushofer, K.(1934)： *Raumüberwindende Mächte*.
50. 若井林一訳(1942)：『大日本 上』洛陽書院，417p. Haushofer, K.(1913)： *Dai Nihon*.
51. 渡辺義晴訳(1942)：地政治学の基礎・本質及び目標. 玉城 肇訳：『地政治学の基礎理論』科学主義工業社，50～87. Haushofer, K. u. a.(1928)： *Bausteine zur Geopolitik*. 第2章.
52. 窪井義道訳(1943)：『大陸政治と海洋政治』大鵬社，235p. Haushofer, K.(1941)： *Weltmeere und Weltmächte*.
53. 向坂逸郎訳(1943)：『アジア民族誌』生活社，388p. Ratzel, F.(1894・1895)： *Völkerkunde*.
54. 佐々木能里男訳(1943)：『日本』第一書房，345p. Haushofer, K.(1930)： *Japans Reichserneuerung (Sammlung Götschen, Bd. 1025)*; Haushofer, K.(1938)： *Alt-Japan (Sammlung Götschen, Bd. 1120)*.
55. 能登志雄訳(1943)：『支那 第5西南支那』河出書房，510p. Von Richthofen, F.(1877～1912)： *China*.
56. 佐藤莊一郎(1944)：『ハウスホーファーの太平洋地政学解説』六興出版，183p. Banse, E.(1933)： *Geographie und Wehrwill.* を含む.
57. 内藤莞爾・牧野 巽訳(1945)：『仏印の村落と農民』生活社，900p. Gourou, P.(1936)： *Paysans du delta Tonkinois*.

第2表 地理学主要誌掲載の年次別・主題別人文地理学関係論文数

年次 主題	1924	1925 1929	1930 1934	1935 1939	1940 1944	小計	1947 1949	1950 1954	1955 1959	1960 1964	1965 1969	1970 1974	1975 1979	1980 1984	1985 1989	1990 1992	小計
総論	0	17	13	6	3	39	2	13	13	5	13	11	16	19	13	3	108
学 史	2	6	4	13	1	26	1	3	2	1	0	5	5	2	11	3	33
地 図	0	6	22	8	1	37	2	4	3	7	8	7	5	5	4	3	48
災 害	0	0	1	3	1	5	0	7	5	16	18	7	4	1	2	1	61
環 境	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	2	11	6	2	5	2	31
疾 病	0	0	0	0	2	2	7	5	1	0	1	6	3	3	3	2	31
人 口	0	15	16	16	5	52	0	22	14	16	7	8	12	8	13	12	112
村 落	0	21	55	45	19	140	12	43	31	24	19	25	10	13	15	10	202
都 市	0	4	13	17	7	41	5	30	22	29	50	39	52	53	38	30	348
経 済	0	5	3	4	2	14	0	2	8	7	4	4	4	3	3	3	38
農 業	1	18	22	33	25	99	14	73	61	61	53	49	53	38	30	16	448
牧 畜	0	1	0	1	5	7	2	9	11	5	1	7	0	5	2	1	43
林 業	0	0	1	0	2	3	0	2	5	1	8	6	4	2	2	3	33
水 産	0	0	1	5	5	11	2	10	18	10	15	6	5	5	7	3	81
資 源	1	4	6	4	4	19	2	6	7	12	10	11	4	4	5	2	63
工 業	0	9	8	14	1	32	1	20	26	40	43	38	24	13	11	11	227
地域開発	1	0	0	0	0	1	0	1	2	5	2	0	4	3	1	0	18
商 業	0	5	3	9	2	19	1	5	10	5	9	24	16	16	22	7	115
交 通	0	8	10	8	6	32	1	19	15	8	11	12	12	17	15	10	120
観 光	5	0	3	2	0	10	1	0	1	3	3	1	5	3	4	3	24
政 治	1	23	8	2	20	54	0	2	6	3	3	4	6	4	2	3	33
社 会	0	0	0	0	0	0	0	7	6	5	5	2	2	8	10	7	52
文 化	1	3	10	13	4	31	1	16	10	14	7	5	10	10	12	6	91
知覚・行動	0	0	0	0	2	2	0	0	0	1	0	0	8	14	18	8	49
歴 史	0	10	17	19	7	53	4	74	47	35	33	47	26	27	19	11	323
地 名	0	4	27	2	11	44	0	9	3	3	0	0	1	0	2	1	19
地 誌	2	50	26	17	10	105	6	10	8	2	4	2	3	2	0	1	38
教 育	0	0	0	1	1	2	4	0	0	2	3	0	0	2	5	2	18
計	14	209	269	242	146	880	69	393	335	321	332	337	300	282	274	164	2,807

主要誌は地理学評論、地球・地理論叢、人文地理、東北地理、各誌の論説・論文・総説・展望・研究ノート・短報を採用。

理学部に地理学講座が創設され、1947年から法政大学、立正大学などの文学部に地理学科の設置がなされることによって、研究・教育制度が拡充され、さらに多数の地理学関係の学会が相次いで創立されていった。前述の西日本地理学会や経済地理学談話会の他に東北地理学会が1947年に設立された。それに伴って諸学会機関誌もまた陸續として発刊された。1945年3月以来休刊となっていた「地理学評論」は1947年6月に復刊され、「東北地理」（1992年から「季刊地理学」に誌名変更）が1948年、人文地理学分野として最初の専門学術誌「人文地理」が同年、「経済地理学年報」が1954年にそれぞれ

刊行を開始した。その後もこのような研究・教育機関、学協会およびその機関誌の設置と刊行が継続されていったが、1952年から始まった主要な国公立大学と私立大学における大学院修士課程と同博士課程の設置によって地理学研究者が急増していった。例えば、日本地理学会での会員数は1947年に382であったが、その後の1957年には1,616にも増加している（1993年現在は3,054）。

このような流れの中で人文地理学の研究動向がどうであったかについて水津（1960）は正鵠を得た指摘を次のように行っている。それは、「学史研究と現実研究の乖離、方法論とフィールド調査の切断、微細地誌へのあくなき逃避—地理学の暗い寒流はいまなお滔々と渦まいている」というものである。このような傾向は、最近において数理科学とコンピュータの発達の影響による地図化技法、リモートセンシング法、地理情報システムなどの新しい方法の急速な発展がみられるものの、現在もなお依然として続いている。さらに、人文地理学における個別化は前代より一層進行し、それによって隣接科学との境界はほとんど消滅した状況にさえなっている。例えば経済地理学について矢田（1979）は次のように述べている。経済地理学の独自の研究対象は見解の一致がみられないが、最大公約数的には国民経済内部の任意地域における経済現象を総合的に記述することであり、この見解の下で生産関係視点・歴史的視点・国民経済視点を持ちながら実証研究が精力的に進められ、それなりの成果があげられてきた。しかし、この側面に隣接科学が積極的に参加し始め、経済地理学の存在が改めて問われるようになった、というのである。この指摘は、地表上の諸現象に関する運動法則の把握を放棄した地理学が求心力を保持しえなくなったことを意味している<sup>14)</sup>。しかし、この求心力の保持が可能であることを示唆する研究もみられる。それは都市システム研究（これについては後述する）である。近代において人間の中心的な居住空間である都市域内部および都市群を対象としてその空間関係の解明を意図したこの研究は、広義の人文的地誌学研究であり、仮に都市と並ぶ人間の居住空間である農村について同様のシステム研究が進展し、さらに両空間の結合システムが明らかにされるならば、これら3種のものを結合することによって、リッター（C. Ritter）やハーツホーン（R. Hartshorne）が地理学独自の対象として主張した地誌学が装いを新たに完成するのではなかろうか。

## II 景観論の論争

1930年代前期に起った景観論の論争は、景観の定義、景観地理学の本質、その方法論などを巡って広範に展開され、岡田（1992）によれば、Landschaft の概念についてのものをも含めると、それらに関する論文数は約120篇にも及び、景観論にかかわらなかった人文地理学研究者はほとんど見当らなかったといっても過言ではない。

論争の発端となった研究は、「地理学評論」に掲載された辻村（1930）である。そこでは、文化景観の形態学が地理学の一分野として位置付けられ、さらに地形学と対峙されてこれと共通の考察方法が利用可能であるとされている。そして景観は地表の形状として表現される人文的形態および分布であり、文化形態は地図上で追跡しうる集落・道路・水路・耕作（土地利用）などによって構成される、と主張されている。この主張に沿って、山地・谷底・高原・海岸・砂丘・三角州・扇状地・台地・火山麓の村落に関する位置・形状・分布およびそれに通ずる道路と周辺の土地利用が、多数の地形図に



基づいて予察されている。結論として、(1)文化景観学は地誌学を系統化し、将来さらに精密な地域論を発達させる階梯ともなりうること、(2)地域論において形態学的方法がさらに進歩すれば、定量的な地域形態測定が必要が生じるに相違なく、そこでは分布地域の面積的相関が重要な問題となること、(3)単純あるいは複雑な景観性質について学術的記載を行うのは容易でないが、景観を構成する因子のうちいくつかのものを組み合わせれば、地方的な文化景観の特性が生じて文化地誌との関係が密接となり、また1つの因子を抽出して他を除外すれば、普遍性を有する人文地理的法則を発見する手段となること、が述べられている。このような辻村の主張や指摘には次のような特徴がみられる。(1)そこでの景観はいうまでもなく *Landschaft* の和訳語であるが、今日の地域という意味を含んだものではなく、可視的景観よりも一層限定された地図で読み取れるものとされていること、および(2)文化景観の発達には、地形の変化が気候と起伏に従って異なる侵蝕営力によって輪廻的もしくは波動的に起ると同様にして生じ、一定の系列を作るとされており、地形進化のアナロジーとしてその発達が説明されていることである。

この論文の発表以後、辻村は多数の著書・論文に景観の概念、研究法、景観地理学の意義など広範な問題について論述し、いわゆる辻村景観学を展開した<sup>15)</sup>。この辻村景観学に対して多くの批判と異論が寄せられたが、その主要なものをあげると、松井(1933)は、上記の辻村論文では文化地理学が経済地理学と景観地理学に2分されているが、そこでの経済地理学が対象とする経済現象には価値観点が欠落しているとし、また赤峰(1937)は、辻村による村落景観の説明は文化景観の社会的経済的基礎面から全く離れた地形区分的形態学であるとした。一層厳しい批判が山口(1943)によってなされており、そこでは人間的な意味は無惨にも機械の蹂躪にかけられ、ただ機械的自然観の立場のみによる景観が存在している、とされている。

辻村景観学から派生してきたものに地域計測論がある。これは前述の辻村論文における結論(2)と密接に関係している。地域計測論は、吉村(1933)にみられるように、基本的には地形図に記された地理的情報(例えば耕地面積、集落分布、傾斜勾配など)の計量化であり、それに関する研究が1930年代前期の「地理学評論」に多数発表された。代表的なものとして寺田(1930)、村田・吉村(1930)、吉村(1930)、松井(1931)などがある。とくに注目されるのは後2者の研究であり、吉村(1930)においては人口移動と熱伝導の関連付けが、松井(1931)においては散村化の確率過程を考慮に入れたボアソンモデルの導出がそれぞれ行われ、現在においても高い評価が得られている。しかし、これらの研究に対して石田(1933)は、社会現象のもつ多様性や特殊性が考慮外に置かれ、物理的決定論にすぎないと批判した。今村(1933)や藤原(1933)による反論があったものの、この批判を境として地域計測論は急速な退潮をみるに至った<sup>16)</sup>。

辻村景観学や地域計測論に対する批判は、結局のところ人文・社会現象は自然現象のように単純ではなく、地域が有する経済関係、社会関係、歴史性によって生起するものであり、そこには自然科学的法則は存在しないということである。この批判を通して地理学における地人相関論の欠陥が指摘され、人文地理学は自然地理学とは異なる思考法を取るべきであると認識されるようになった。

### Ⅲ 日本の地政学

地政学という語はGeopolitikの和訳語で地政治学ともいわれ、スウェーデンの国家政治学者チェレン（R. Kjellén）によって1899年の彼の著書 *Studier öfuer Sveriges politiska gräuser* の中で初めて用いられたものである。彼は1916年に *Staten som lifsform* を著し、従来の法制的国家観を排して国土と国民から主として構成される生物学的な意味での有機体としての国家観（ラッチェルの国家有機体説に沿っているとされている）を主張した。そして国家学の内容を、①政治的に組織化された土地を考察する部門—地政学（Geopolitik）、②政治的に組織された民族集団すなわち国民を考察する部門—民政学（Demopolitik）、③経済的側面からみた国家を考察する部門—経政学（Ekopolitik）、④社会として現れた国家を考察する部門—社政学（Sociopolitik）、⑤国家の憲法および行政政策を通して現れた統治を考察する部門—治政学（Regementspolitik）、の5つに分類した。この著書は1917年に独訳され、その第4版が1924年に刊行されるに及んでドイツでにわかに注目されるに至った<sup>17)</sup>。同時期にハウスホーファーがチェレンによる①を重視してオブスト（E. Obst）、ラウテンザッハ（H. Lautensach）、マウル（O. Maull）とともに雑誌 *Zeitschrift für Geopolitik*（1924～1955年）を創刊し、これを契機としてゲオポリチクが新興科学として登場してきた。この雑誌は発生的には *Weltpolitik und Weltwirtschaft* の継続誌であり<sup>18)</sup>、ゲオポリチクの名を冠しているものの、創刊当時は世界各地の政治・経済を扱った評論を収録したものであった。ハウスホーファーはこの雑誌の発刊と同時に *Geopolitik des pazifischen Ozeans* を刊行し<sup>19)</sup>、その中でゲオポリチクは、地球上に生活空間を求めるとして、国家的生活形態の生存闘争における政治行動の技術に対する科学的基礎であるとし、その後の多数の著書の中では政治行動のための武器を提供するとした。しかし、当時ゲオポリチクの定義は明確ではなく、政治地理学との区別が不明であった。そのようなことは不問に付したままハウスホーファーは、ゲオポリチクは政治地理学の基礎の上に立ち、実際の政治を確固たる地盤から飛躍の必然的地位にまで導きうる技術論、換言すれば国家の未来を志向している科学であると主張した<sup>20)</sup>。このゲオポリチクのもつ未来志向性が当時のナチ政権の国策と合致したことから、ゲオポリチクは脚光を浴びるようになった。

ゲオポリチクを日本に初めて紹介したのは政治学者の藤澤（1925）であり、チェレンの前掲書を解説した。地理学界においては飯本（1928）がラッチェルからハウスホーファーに至る政治地理学もしくはゲオポリチクの系譜・本質・方法・限界について言及している。この導入期では、竹内（1974）が指摘しているように、日本の地理学界は総じて消極的であった。しかし、1931年の満州事変の勃発以降の中国大陆侵略に伴い、日本社会全体が軍国主義体制へ移行し、地理学もまたその体制の影響を受けるようになった。例えば「地学雑誌」は1938年から中国や東南アジアに関する特集号を編集し、「地理教育」や「地理学」（1933～1944年）もまた国際政治に関連した特集号を刊行している。大東亜新秩序の建設方針が政府から出された1940年には、小牧（1940a）は日本独自の地政学を提唱して、東亜が日本を中心とした統一体であるべきと主張するとともに、皇道主義に基づいてその統一体の実現を目指す地理学を示した。次いで小牧（1940b）と小牧（1942）はこのような地理学の主張の下で、

西欧文明に覆われた地域の日本の主導下での変革を説いた。このような潮流に伴って、第1表に見られるように、ゲオポリティクに関する多数の訳書が出版された。また1941年には軍人主導下で日本地政学協会が設立され、その機関誌「地政学」（1944年3月まで）が創刊された。この協会には常務理事として飯本信之、評議員には秋岡のほか多くの地理学者が名を連ねていた。「地政学」創刊号には6編の論説が掲載されていたが、ドイツの場合と同様に地政学の定義や本質の明示はなく、その実践性のみが強調されている。

このような地政学に対する当時の反響は大きく、小牧（1942）の序にみられるように、とくにジャーナリズムに持て囃された。第2次世界大戦後では地政学に新たな価値を加える試みがなされているが、大戦終結とともに上述のような内容をもったゲオポリティクも地政学も消滅した。戦後これらに対して様々な批判が行われているが（例えば飯塚、1947, p.169-209）、水野（1953）が述べているように、象牙の塔にあって化石化しつつあった地理学に実践性という要素を注入したこと、および人間精神を復活させたことによって地理学に一種のルネッサンスを起こさせたということもできるであろう。

#### IV 都市システム研究

システムを、それを構成する要素が互に関係し、かつ要素がもつ属性が互に関係し、そのような要素の群が1つの集合体を成すときのその集合体と解することができる。要素を地理的単位、属性をその単元の特性にそれぞれ置き換えるならば、システムは地域と考えられる。このような含意の地域は、リッターの“充填された領域”あるいはハットナーの“関係の科学としての地理学”の主体を成す地域にほかならない。前述のように、日本の人文地理学においてその近代化の当初から集落研究が1つの主要課題となっていたが、都市への人口集中に伴って集落研究者の関心が村落から都市へと当然のことながら移行していった。第2次世界大戦前では都市景観・都市形態・都市史を扱った研究が主流を占めていたが、戦後になると都市機能や都市圏が注目され、形態論から機能論への転換がみられるようになった。この流れの中で重要な貢献をなしたのは木内（1951）であり、その中ですでに都市内域に関する空間的システム論が展開されている。1958年には木内信蔵の主導下で日本地理学会において都市化研究委員会が発足し、その委員会の研究成果の1つとして木内ほか（1964）が刊行された。そこでは都市化の進展による都市内域での地域分化と都市近郊の機能変化が明らかにされている<sup>21)</sup>。このような研究によって都市内システムの解明が進んだ。1960年代後期になると、レッシュ（A. Lösch）およびクリスタラー（W. Christaller）の訳書（篠原訳、1968；江澤訳、1969）が刊行され、またクリスタラーの中心地理論の日本各地に対する検証を行った森川（1974）が発表されるに及んで、都市間の結合関係および都市属性の特徴によるその関係の重層性が考察されるに至った。換言すれば都市群システムの研究が展開されたのである。その後、都市システムの含意の精緻化や計量的方法の導入などにより、都市内域の因子生態構造、都市規模や都市属性の差異に伴うシステムの構造的相違、都市システムの発展過程、システム予測など多様な研究が進められ、日本の都市システムの国際比較が可能にさえなっている。国際比較研究をも含めて日本の都市システム研究の成果は膨大な数にのぼるが<sup>22)</sup>、それは田辺編（1982）にほぼ集約されるであろう。

## 註

- 1) この講座設立は小藤文次郎の尽力による。なお、理科大学では1902年から地理学が開講されていた。
- 2) 山崎直方は1912年に正教授となり、東京高等師範学校については兼任教授となった。
- 3) 帝国大学令の改定によって1919年理科大学は理学部に改められた。
- 4) 小川琢治の封任は1908年9月からで、それ以前の1907年9月からは石橋五郎が助教授として着任した。
- 5) 例えば小川（1914）は日本における集落地理学に関しての最初の本格的論文である。なお、山崎と小川の日本地理学界への貢献については、石田（1971）、水津（1971）、吉川（1971）を参照されたい。
- 6) 帝国大学令の改正により1911年に法科大学の経済学科と商業学科が一体化されて経済学部が設置された。
- 7) 日本地理学会の設立状況については、「地理」編集部（1960）と石田（1975）に詳しい。
- 8) 「地学雑誌」は1944年9月から1948年8月まで、「地質学雑誌」は1944年7月から1946年8月まで、「歴史地理」は1944年1月から1952年2月までそれぞれ休刊している。
- 9) 第2次世界大戦前の地理学関係雑誌の全容については中川（1976）が詳述している。
- 10) ドイツ地理学の潮流については水津（1974）や手塚（1991）に詳しい。
- 11) 第32巻第3号（1959）まで名称変更があったものの継続されていた。
- 12) これについては京都大学文学部地理学教室編（1982）を参照されたい。
- 13) 但し、1950～1954年については、矢澤（1975）によれば、その時期が新制大学の発足期に当り、その教官資格の取得のために論文数が急増した。
- 14) このことは、Gaile and Willmott（1989）が述べているように、世界全体の地理学界にみられる傾向である。
- 15) 詳事は岡田（1987）を参照されたい。
- 16) これについては石川（1982）を参照されたい。
- 17) この第4版の和訳書は第1表の25・34・43である。
- 18) この雑誌は1925年と1926年で2巻を出版した小雑誌である。*Zeitschrift für Geopolitik*はその巻数はJg. 1～Jg.26であり、これの継続後誌*Zeitschrift für Geopolitik in Gemeinschaft und Politik*（1956～1968年）が巻号を継承し、Jg.39まで発行された。後2誌の編集機関はInstitut für Geozozoologie und Politikであった。
- 19) これの和訳書は第1表の33・44である。
- 20) 第1表の38・51に詳述されている。
- 21) 都市近郊の機能変化はすでに小田内（1918）に論及されていた。
- 22) 理論的・実証的な研究成果のうち注目されるものをあげれば、森川（1980・1990）、林（1986）、阿部（1991）である。

## 参 考 文 献

- 赤峰倫介（1937）：最近に於ける地理学並に歴史地理学研究の成果。歴史学研究, 7, 295～316.
- 阿部和俊（1991）：『日本の都市体系研究』地人書房, 323p.
- 飯塚浩二（1947）：『地理学批判—社会科学の一分野としての地理学—』帝国書院, 209p.
- 飯塚浩二（1949）：『人文地理学説史』日本評論社, 223p.
- 飯本信之（1928）：所謂地政学の概念。地理学評論, 4, 76～99.
- 石川義孝（1982）：地域計測論に関する一考察。京都大学文学部地理学教室編：『地理の思想』地人書房, 289～297.
- 石田龍次郎（1933）：地理学に於ける法則性—主として環境説と決定説に就いて—(1), (2). 地理教育, 17, 355～360, 472～478.
- 石田龍次郎（1969）：『東京地学協会報告』（明治12～30年）—明治前半の日本地理学史資料として—。一橋大学研究年報 社会学研究, 10, 1～83.
- 石田龍次郎（1971）：明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向—山崎直方・小川琢治の昭和期への役割—。地理学評論, 44, 532～551.
- 石田龍次郎（1975）：戦前回顧。日本地理学会編：『日本地理学会五十年史』, 1～37.
- 今村學郎（1933）：石田龍次郎氏の「地理学に於ける法則性」の読後感。地理教育, 17, 580～586.
- 江澤譲爾訳（1969）：『都市の立地と発展』大明堂, 396p. Christaller, W. (1933) : *Die zentralen Orte in*

- Süddeutschland. Gustav Fischer Verl., Jena, 331s.
- 岡田俊裕 (1987) : 辻村太郎の「景観」学説. 地理科学, **42**, 67~81.
- 岡田俊裕 (1992) : 『近現代日本地理学思想史 一個人史的研究一』古今書院, 435p.
- 小川琢治 (1914) : 越中国西部の荘宅 Homesteads に就て. 地学雑誌, **26-312**, 895~905.
- 小田内通敏 (1918) : 『帝都と近郊 一都市及村落の研究一』大倉研究所, 215p.
- 木内信蔵 (1951) : 『都市地理学研究』古今書院, 435p.
- 木内信蔵・山鹿誠次・清水馨八郎・稲永幸男編 (1964) : 『日本の都市化 (形成選書)』古今書院, 187p.
- 京都大学文学部地理学教室編 (1982) : 『地理の思想』地人書房, 320p.
- 小藤次郎 (1889) : 地学雑誌発行ニ付地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス. 地学雑誌, **1-1**, 1~3.
- 小牧實繁 (1940a) : 日本地政学的主張. 地理論叢, **11**, 3~6.
- 小牧實繁 (1940b) : 『日本地政学宣言』弘文堂, 211p.
- 小牧實繁 (1942) : 『日本地政学』大日本雄辨会講談社, 276p.
- 篠原泰三訳 (1968) : 『経済立地論』大明堂, 622p.
- Lösch, A. (1962): *Die räumliche Ordnung der Wirtschaft*. 3. Aufl. Gustav Fischer Verl., Stuttgart, 380s.
- 水津一朗 (1960) : 人文地理学の回顧と展望. 地理, **5-1**, 26~34.
- 水津一朗 (1971) : 小川琢治先生とその後の日本における歴史地理学. 地理学評論, **44**, 565~580.
- 水津一朗 (1974) : 『近代地理学の開拓者たち』地人書房, 235p.
- 竹内啓一 (1974) : 日本におけるケオポリチクと地理学. 一橋論叢, **72**, 169~191.
- 田辺健一編 (1982) : 『日本の都市システム 一地理学的研究一』古今書院, 484p.
- 田村百代 (1978) : 小藤次郎によるドイツ地理学の導入 一「地学雑誌発行ニ付地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス」とその原典一. 地理学評論, **51**, 406~415.
- 「地理」編集部 (1960) : 一座談会 一日本地理学会創立前後の事情. 地理, **5-1**, 11~16.
- 辻村太郎 (1930) : 文化景観の形態学. 地理学評論, **6**, 1209~1241.
- 坪井九馬三 (1905) : 『歴史地理学』早稲田大学出版部, 234p.
- 手塚 章編 (1991) : 『地理学の古典』古今書院, 422p.
- 寺田寅彦 (1930) : 地形図に於ける傾斜勾配分布の統計的研究方法に就て. 地理学評論, **6**, 653~661.
- 東京帝国大学 (1932) : 『東京帝国大学五十年史下』, 1333p.
- 中川浩一 (1976) : 地理学雑誌の系譜 上, 中, 下. 地理, **21-9~11**, 90~98, 97~104, 98~106.
- 林 上 (1986) : 『中心地理論研究』大明堂, 694p.
- 藤澤親雄 (1925) : ルドルフ・チェレーンの国家に関する学説. 国際法外交雑誌, **24**, 155~175.
- 藤原咲平 (1933) : 石田氏の所論に就いて. 地理教育, **18**, 34~43.
- 松井 勇 (1931) : 砺波平野の一部に於ける散村の分布状態に関する統計的一考察. 地理学評論, **7**, 459~476.
- 松井武敏 (1933) : 経済地理序説 一實際研究の序として一. 地理論叢, **2**, 100~137.
- 水野 元 (1953) : 地政学に対する私見. 地理学報告 (愛知学芸大学), **2**, 51~54.
- 村田貞蔵・吉村信吉 (1930) : 聚落の人口とその耕作面積の理論的考察. 地理学評論, **6**, 381~411.
- 森川 洋 (1974) : 『中心地研究 一理論, 研究動向および実証一』大明堂, 457p.
- 森川 洋 (1980) : 『中心地論 I, II』大明堂, 466p.
- 森川 洋 (1990) : 『都市化と都市システム』大明堂, 254p.
- 矢澤大二 (1975) : 日本地理学会の研究活動. 日本地理学会編 : 『日本地理学会五十年史』, 71~114.
- 矢田俊文 (1979) : 経済地理学の課題と展望. 地理, **24-1**, 36~42.
- 山口貞雄 (1943) : 『日本を中心とせる輓近地理学発達史』済美堂, 265p.
- 吉川虎雄 (1971) : 山崎直方先生と変動地形の研究. 地理学評論, **44**, 532~551.
- 吉田敏弘 (1982) : 史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜. 京都大学文学部地理学教室編 : 『地理の思想』地人書房, 192~205.
- 吉村信吉 (1930) : 地名による人口移動の一考察 (第1報). 地理学評論, **6**, 163~178.
- 吉村信吉 (1933) : 『岩波講座 地理学 I (総論) 地域計測論』岩波書店, 52p.
- Dickinson, R.E. and Howarth, O.J.R. (1933) : *The making of geography*. Clarendon Press, London, 264p.
- Gaile, G.L. and Willmott, C.J. (1989) : *Geography in America*. Merrill Pub. Co., Columbus/Toronto/London/Melbourne, 840p.

## The Trend of Human Geography in Japan: An Overview

Takashi OKUNO

An academic field is usually regarded as modern and independent discipline when it is equipped with three elements: research or educational institutions, scientific associations, and specialized journals. In this sense, it was in the 1920s when the modern geography of Japan appeared.

Two geographical faculties were founded in two Imperial Universities of Kyoto and Tokyo in 1907 and 1911, respectively, to rapidly introduce and diffuse modern west European knowledge. While the Faculty of Geography in Tokyo was an offspring of the Faculty of Geology, that in Kyoto was independently established in the Institute of History. Therefore, the academic traditions of the two institutions differed from their inception. The faculty in Kyoto emphasized human geography, partly under the influence of the first chairman, Takuji Ogawa, an expert of Chinese classical history as well as a geologist. Even before the establishment of the two geographical institutions, a few geographical lecture programs already took place when the modern educational constitution was enforced in the early Meiji era. The programs continued in many normal schools to foster geographical teachers in primary or secondary schools.

The Tokyo Geographical Society (Tokyo Chigaku Kyokai) was established in 1897 modeled after the Royal Geographical Society in United Kingdom. However, the activities of this society were neither academic nor geographical. Although this association covered various fields of geoscience, its main concern was geology rather than geography. The first two associations specialized in geography were organized in 1924 and 1925. They were the Earth Study Group (Chikyu Gakudan) relating to the Faculty of Geography in Kyoto, and Association of Japanese Geographers (Nihon Chiri Gakkai) being composed of the faculty members of Imperial Universities of Tokyo and Kyoto as well as those of the Tokyo Higher Normal School. Through annual meetings and bulletins these associations functioned to develop Japanese geography, both human and physical. It was only after World War II that human geographers organized their own academic associations. These societies include the Nishi Nihon Chiri Gakkai in 1946 (changed his name to the Human Geographical Society of Japan [Jinbun Chiri Gakkai] in 1948), the Keizai Chirigaku Danwakai in 1952 (changed to the Association of Economic Geographers [Keizai Chiri Gakkai] in 1954), the Seiji Chiri Kenkyukai in 1959 (changed to the Association of Political Geography [Nihon Seiji Chiri Gakkai]), and the Rekishi Chiri Kenkyukai in 1959 (changed to the Association of Historical Geographers in Japan [Rekishi Chiri Gakkai] in 1966).

As major geographical bulletins, the first issues of the *Earth* (*Chikyu*) and the *Geographical Review of Japan* (*Chirigaku Hyoron*) published in 1924 and 1925 by the Earth Study Group and the Association of Japanese Geographers, respectively. Although many geographical journals had already circulated, such as the *Tokyo Chigaku Kyokai Hokoku*, the *Chigaku Zasshi*, the *Chiri Kyoiku*, and the *Rekishi Chiri*, their contents were filled up by educational or enlightening articles, and laid stresses on geology and history.

Geography in Japan, already established as an independent discipline in the 1920s, was great-

ly influenced by the contemporary German and French thought or ideology like other disciplines in Japan in the cradle period. German influence was dominant in the pre World War I period. Japanese geographers adopted the German idea of geography as the science of relationship among all phenomena on the earth and the concept of region as spatial complex of these phenomena. Also a dynamic viewpoint of region based upon Darwinism was presented. In the 1920s some prominent geographical ideas were presented in Germany, which included Ratzel's magnificent ideology of geography as an exhaustive mixture of all natural and human materials, Hettner's geography as chorological science, and Schlüter's methodology of regional study. Also Geopolitik was gaining its strength in the decade. Three leaders, T. Ogawa, N. Yamazaki, and K. Tanaka in the Tokyo Bunrika Daigaku, of the geographical faculties gave lectures on the basis of western European knowledge obtained through their experiences in German and French. The number of professional geographers gradually increased under the guidance of these three leaders. They vigorously applied western European methodology to their own subjects, while introducing and reviewing many foreign articles on geographical journals. They also translated some prominent books or texts into Japanese (see Table 1 in which main translation of human geography were shown).

During the 1920s Japanese geography demonstrated its centripetal force under the influence of Ratzel. Many researches were conducted combining natural conditions with mankind activities. Japanese geography was segmented into physical and human geography with the debate upon the cultural landscape study by T. Tsujimura in 1930 and the chorometric researches being in the wake of Tsujimura's methodology. The antitheses of these studies were the emphasizing of economic and historical characters in human activities.

Japanese human geography loosed from the bound of physical geography encountered the next trial in the 1940s. Geopolitics, introduced from German Geopolitik, flourished under the Japanese Imperialism and the World War II took place. Although Japanese geographical society revived nimbly its research activities after the War and showed more predominant development than before, its subjectes were increasingly diversified and the boundary with adjacent fields became undistinguished. Reviewing on the trend of the post War period, Suizu (1960) critically identified three currents: the discrepancy between both the geographical ideology and substantive research activities, the rupture between the methodology and the field work, and the flight to the micro-scale regional study. These trends have continued to the present time. Nevertheless, two movements begin to challenge such trends. The first is the emerge of the studies on spatial perception and human behavior in the spatial context. Although Ratzel formerly excluded the influence of nature on the individual psychology from the four kinds of geographical subjects, the movement mentioned above shows that psychological aspests can be corporated into the geographical frame. The second is the evolution of urban system studies in which we can in part see the influence of American quantitative revolution. Obviously this is a kind of new human regional geography. By elaborating system analysis of rural areas and identifying systems connecting rural and urban areas, these studies may lead, as Hettner intended, to comprehensive regional geography in at least a national scale.